

# 4-4

災害対応力を育てる

## 避難行動を想定・試行する

(2) DECOの理念と目的 - コーチングの方法について -

田口 空一郎

DECOはDisaster Evacuation Coachingの略で、ファーストエイドやサバイバルスキルなどを学ぶフィジカルな訓練と、地域のコミュニティや想定災害などについてITを活用して学ぶ情報学習の二つの学習分野が統合された防災教育・災害訓練プログラムです。

なかでもDECOにおいてユニークなのは、受講者の防災リーダーとしての主体性を引き出すためにコーチングの方法を組み込んでいること、また、先述した二つの学習分野を学んだ上で、それを実際の街中での実地訓練(「すごい災害訓練」)で応用して、学習内容の定着化を図るという、まったく新しいタイプのアクティブ・ラーニング型教育プログラムであるということです。

この章では、まずDECOの理念と目的を解説し、その上で、DECOを成功させるために重要なコーチングの方法について解説したいと思います。

### DECOの理念「災害の歴史と経験に学び、行動に生かす」

DECOプロジェクトは、筆者の田口が2011年3月11日に発生した東日本大震災に対する官民の被災地支援活動(医療支援、物資支援、子どもハウスの寄贈など)に関わる中で、志を同じくする仲間たちと

2012年に一般社団法人フューチャー・ラボを立ち上げ、共感する企業からの助成金を2013年末に得て、スタートしました。

その時期は、すでに単なる物資支援の段階は終わっていましたので、私は3.11東日本大震災を始めとする「災害の歴史や経験を学び、行動に生かす」ことを理念とする防災リーダー養成プログラムを開発しようと決意しました。

被災地支援活動をともにした日本登山医学会を始めとする医療者、災害情報や空間情報を得意とするITや教育の専門家などにお声掛けし、上記理念の下にDECOプロジェクトチームは結成されたのです。



2011年12月22日、石巻市北上町にて、仲間と寄贈した「大指十三浜子どもハウス」の前で



2012年11月1日、南相馬市にて、開設支援した「浜通り訪問リハビリステーション」内で

### 自己紹介: 田口空一郎

- 一般社団法人フューチャー・ラボ 代表理事 (東日本大震災において石巻および南相馬支援に従事)
- 政府与党「東日本大震災 被災者健康対策チーム」スタッフ
- 河北総合病院 理事長政策室 室長
- 東京財団「医療介護・社会保障」プロジェクトメンバー
- NPO法人医療の質に関する研究会 統括研究員 等歴任
- 防災士、日本防災士協会会員
- 上級救命技能認定(自動体外式除細動器業務従事者)
- BCS認定プロフェッショナル・ビジネスコーチ
- 日本ファシリテーション協会会員 等



### DECOの目的: 統合的な6つの学習要素

防災リーダーの養成を目指すDECOの目的は、以下の6つの学習要素から成り立っています。それぞれその意義を順を追って解説しましょう。

#### DECOの目的

1. 災害時のリーダーシップやチーム構築について学ぶ
2. ICTスキルを高める
3. 地域の想定される震災の規模・内容を知る
4. 地域コミュニティを知る
5. サバイバルスキルを学ぶ
6. 基礎的なファーストエイドや医療サポーターとしてのスキルを学ぶ

#### 1. 災害時のリーダーシップやチーム構築について学ぶ

3.11東日本大震災の直後より、釜石市の釜石東中学校の生徒たちがリーダーシップを発揮し、近隣の小学生や高齢者の避難を率先して誘導したという事例が話題になりました。その背景には、群馬大学の片田敏孝氏による、釜石市の小中学生に対する平時からの防災教育の効果がありました。

片田氏が唱える津波避難の三原則とは、①想定にとらわれるな、②最善をつくせ、③率先避難者たれ、の三つです。ここには防災リーダーを育てる上で大きなヒントが秘められています。

すなわち、①想定に縛られない柔軟な発想と思考力、②非常時においても最善を尽くせる冷静な判断力と行動力、③仲間を巻き込んで災害弱者を率先的に避難誘導・救助できるリーダーシップとチーム構築力、といった、防災リーダーとして必須の条件がそこに含まれているからです。

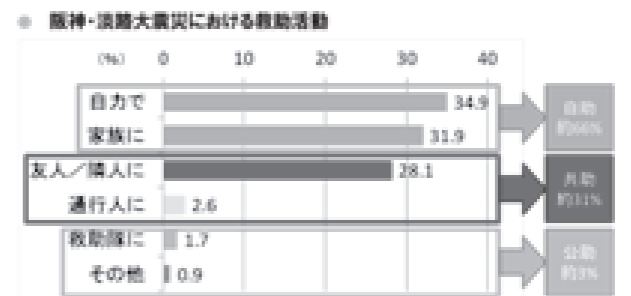
都市型災害の典型である阪神淡路大震災において、人命救助活動の約66%は自力または家族による救助、つまり「自助」であり、友人や隣人、通行人による「共助」も約31%に上るなど、約97%が「公助」以外の自助・共助によるものでした。

このことは緊急性や被害の甚大性に対して限られたリソースを優先的に配分する「公助」の無意味さを示すものではなく、発災直後における混乱時に、可及的速やかに避難行動や救助活動に対応できる災害主体は市民自身であることを示しています。そうした自助・共助の担い手となる主体的な防災リーダーを育成することこそ、DECOの第一の目的といえます。

参考リンク:

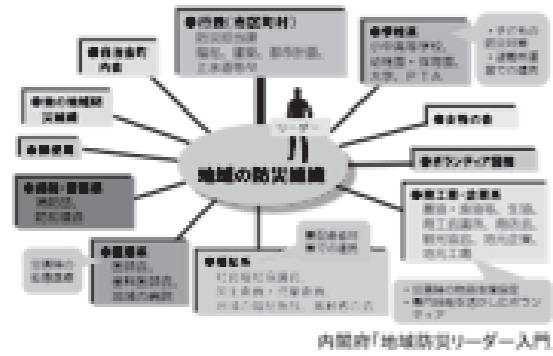
NHK「片田敏孝先生のいのちを守る特別授業」  
[http://www.nhk.or.jp/sonae/mirai/program\\_sp01/index.html](http://www.nhk.or.jp/sonae/mirai/program_sp01/index.html)

### 市民防災リーダーが必要な理由 I 「自助・共助の比率の大きさ」



日本大学「1995年兵庫県南部地震における大規模災害に関する調査報告書」(1996)

## 市民防災リーダーが必要な理由Ⅱ 「リーダーシップと連携が必要な社会構造」



### 2. ICTスキルを高める

3.11東日本大震災などの災害時に、携帯電話は通じないがTwitterや携帯メールは使えた、といった経験をした方は少なくないかもしれません。あるいは台風・雪害・水害などによる交通麻痺の状況を調べるのに携帯アプリやTwitterの検索機能を使った経験がある方もいらっしゃるかもしれません。そして今やどの自治体においても、ハザードマップなどの防災情報をWebサイトで公開する時代になっています。災害と情報、災害とICTは切っても切れない関係にあるといえます。

そこでDECOでは、ICTつまり情報コミュニケーションのツールとして、タブレット端末やスマートホン、PCや携帯型バッテリーなど、様々な電子媒体(device)や各種アプリを活用するためのスキルを習得し、さらには紙データと同様、デジタルデータの防災情報、地図情報を主体的に作成・処理できる基礎的なスキルを習得することも目的のひとつとしています。

### 3. 地域の想定される震災の規模・内容を知る

起こりうる災害の種類や規模・内容は、その人が住む地域の地理的特性や気象条件、災害の発生時間帯などによって大きく異なります。したがってDECOにおいては、防災・減災の基本として、開催す

る地域の地理的特性をしっかりと学び、そこから予想される災害の規模と内容を知ることも目的のひとつとしています。

DECOの開催に当っては、ハザードマップや倒壊・浸水・延焼予想データなど、入手しうる災害関連データを現地自治体などの協力を得てしっかり収集し、整理しておく必要があります。そのデータをもとに実地訓練のシナリオを作り、その訓練のために必要な知識やスキルは何かを逆算して、学習要素の中身に反映するのです。

地域のローカルな特性と科学的データからの帰納に基づく防災教育・災害訓練こそ、DECOの大きな特性といえます。

### 4. 地域コミュニティを知る

地域の地理的特性に並んで、地域の社会経済的な歴史・背景を把握しておくこと、また地域内で活動する官民の様々な防災上のステークホルダー(行政、消防、警察、医療機関、社会福祉協議会、災害ボランティア、学校、自治会、商店街等)や地域内のリソース(避難所、救護所、防災倉庫、消火設備、食品・日用品・薬品・燃料等の小売店等)を知ることもDECOの目的のひとつです。

自分が住んでいる地域はもちろんのこと、自分が通勤・通学している地域がどのような歴史をもっていて、どのような人々やリソースを抱えたコミュニティなのか、知っているつもりであまり多くを知らないというのが実情ではないでしょうか。

DIG(図上災害訓練)や実地訓練などの学習を通じて、防災という視点から地域を見直してみることで、災害時だけでなく、平時においても地域のコミュニティや地域内の人々との繋がりが重要であることに気づくはずで

### 5. サバイバルスキルを学ぶ

災害時に問われるのは、まず自分の身を守り、生き延びる自助の力です。そうした自助の力があって初めて、仲間や隣人を助け守る共助を実行することができるのです。自助・共助の担い手としての防災リーダーの養成を目指すDECOでは、時に医学知識を交えつつ、熱中症や低体温症からの身の守り方や、災害時における食事のとり方、避難所で多くの人と就寝する際の注意点などのサバイバルスキルを学ぶことも目的のひとつです。

### 6. 基礎的なファーストエイドや医療サポーターとしてのスキルを学ぶ

災害時における自助・共助の基本として、軽度の傷病者に対して応急処置が施せること、また、救護所や避難所などのしかるべき場所へ他者と協力して傷病者を搬送することができること、など、ファーストエイドや災害時の医療サポーターとして行動できるためのスキルを学ぶこともDECOの目的のひとつです。

以上、DECOの6つの目的を解説してきました。DECOの特徴は、これらの多面的な学習要素をひとつのプログラムの中で学び、経験することにあります。開催に当っては多くの専門家の協力が必要になりますが、専門分化した専門知や実践知を防災リーダー養成という一点で統合的に学習できることこそDECOの強みであると筆者は考えています。

### コーチングの目的と方法

上述の6つの目的の実現に向けて参加者の目的意識を明確にし、学習効果を高めるために、DECOではコーチングの手法を採用しています。コーチング(coaching)の目的は、人や組織の目標達成に向けた実行を支援することであり、何かの知識やスキルを

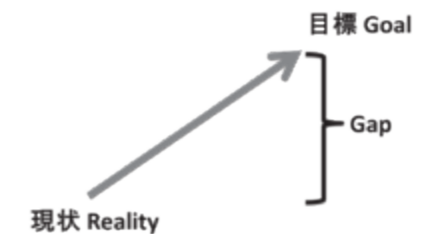
理解させることが目的のティーチング(teaching)とまったく異なり、受講者が目標に向かって具体的に行動変容したかどうか大きな評価ポイントになります。

DECOの6つの目的を実現するためには、各学習要素についてティーチングする(教える)ことも当然必要になりますが、それらを単に記憶するだけでなく、地域の防災リーダーとしてそれらを主体的に活用できるような行動変容に結び付けること、それこそがDECOにおいてコーチングを採用する最大の目的といえるのです。

具体的なコーチングのプロセスは、目標を設定することから始まります。DECOでいえば、6つの学習要素に対して参加者それぞれが目標意識を持ち、それに対して自分の現状はどこにあるかを知り、目標を達成するためには何を学ぶ必要があるかを知り、各学習や実地訓練などを通じて行動に定着化させていく、というプロセスをたどります。



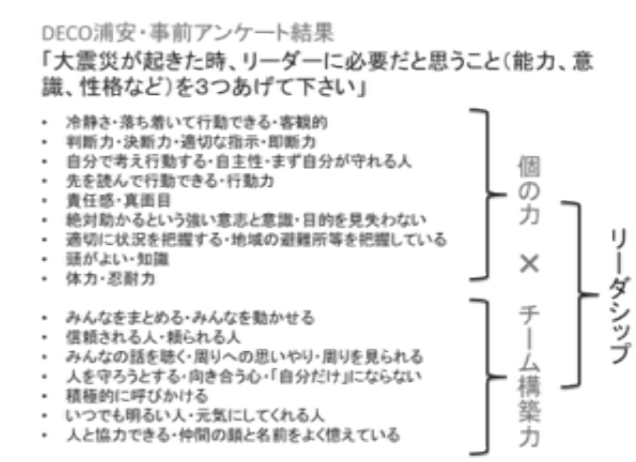
その際にもっとも重要なのは、目標に対して自分が現状ではどのレベルにいて、現状と目標の間のギャップはどの程度のものであるかを、受講者本人が強く意識するという事です。目標がなければ行動変容に向けた気づきは生まれませんし、自分の立っている場所を知らなければ、目標に向かってどのようにそのギャップを埋めてよいかも分かりません。



## リーダーシップとチーム構築力の開発

先述したように、DECOの目的の中には、地域の災害対応に際してリーダーシップを発揮できる人材を養成すること、また様々なステークホルダーと協力して災害対応が可能なチーム構築力を開発することが含まれます。このためにもっとも有効な手法こそコーチングといえるでしょう。

事前・事後のアンケートに際しても、参加者に対して災害時に必要なリーダーシップの条件を質問することも、意識づけに有効です。参考までに、以下にDECO浦安の開催前に参加予定者に実施した、リーダーの条件に関するアンケート結果を示します。



世に流通するリーダー論は百家争鳴ですが、このアンケート結果を読むと、リーダーにとって個の力が必要になる場面と、他者を巻き込むチーム構築力が必要になる場面とがあることを中学生も理解していることが分かります。筆者も感銘を受けたことを今でも覚えています。

こうしたアンケート結果等を参考にしつつ、災害時のリーダーの条件とは何か、受講者同士でのグループ・ディスカッションや、プレゼンテーションをしてもらうことも、主体性を引き出す上で大きな効果を生み出してくれるでしょう。このことは、災害シミュレーションとしての実地訓練に際して、受講者各自がいかにか主体的に行動す

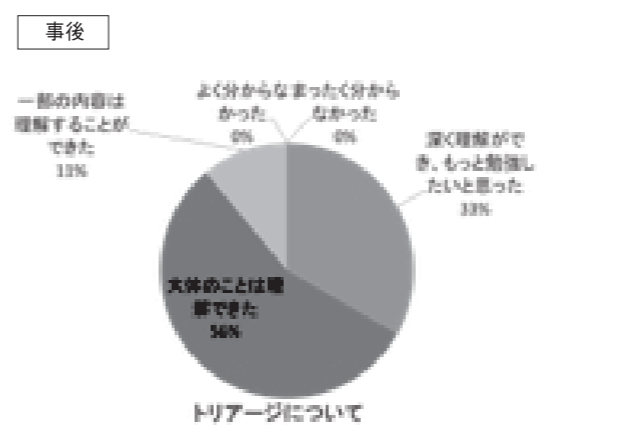
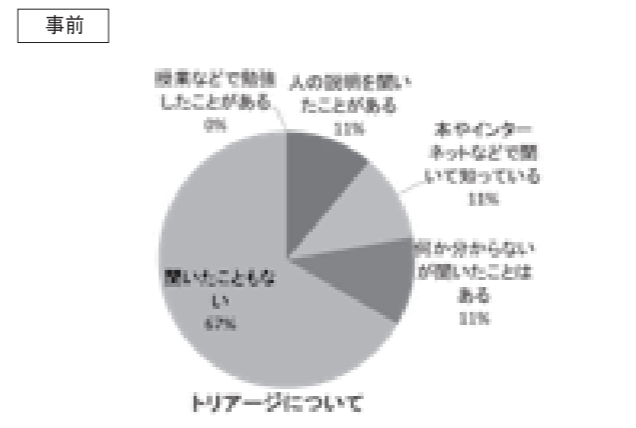
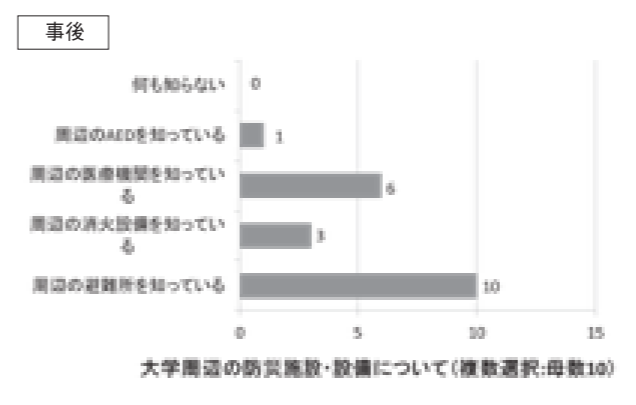
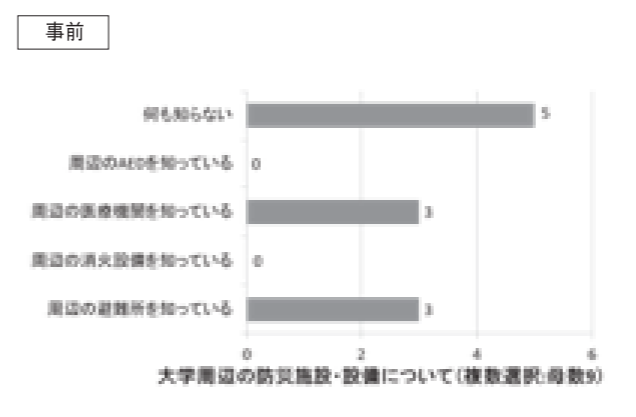
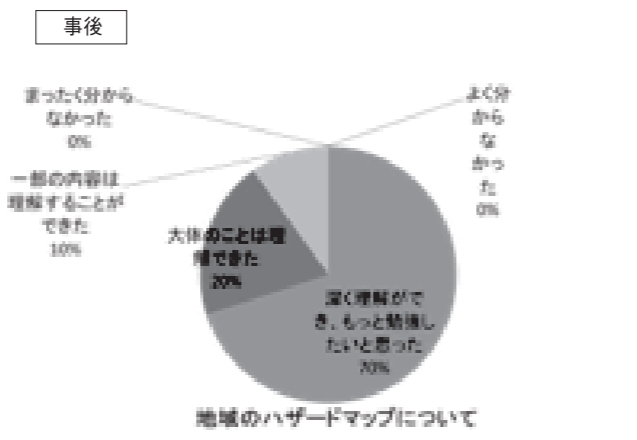
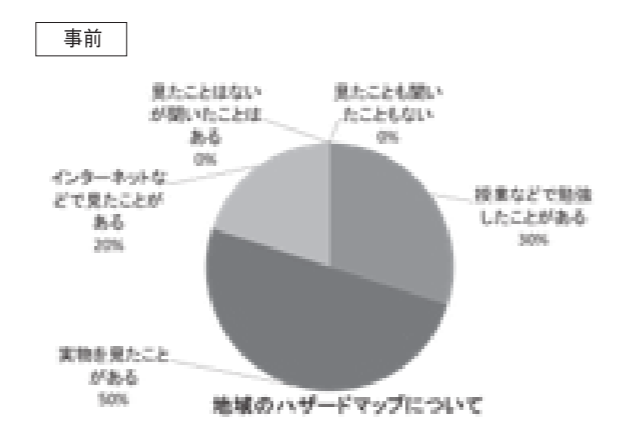
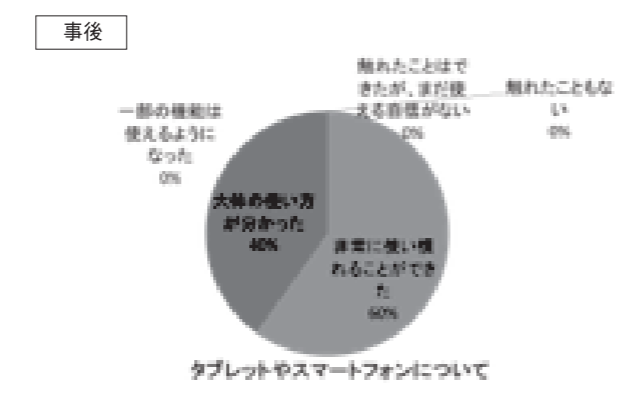
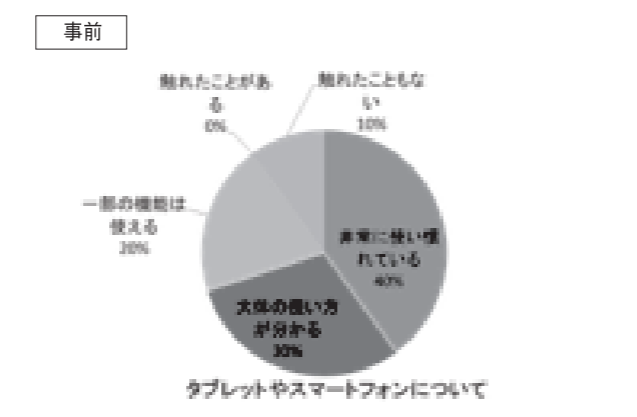
したがってDECOの冒頭と最後に、導入と振り返りのコーチングの時間を置き、しっかりと現状と目標に対する意識づけを受講者に与えること、そして何か行動変容や成長があればコーチとしてそれをフィードバックしてあげることが非常に大事になります。参考までに浦安市と共催で中学生を対象に実施したDECO浦安のタイムテーブルを挙げておきます。

最初と最後の時間にコーチングをすることで、学習効果は高まりますが、各学習要素に対する受講者のレベルの現状把握と、受講後の成長度合いを測るためにも、DECOの学習の開始前と終了後のどこかのタイミングで、参加者に対してアンケートを実施することをお奨めします。参考までに大阪市立大学と共催したDECO住吉のアンケート結果の一部を挙げておきます。

参考)DECOタイムテーブル(浦安市と共催したDECO浦安の事例)

プログラム	学習目標
オリエンテーション&導入コーチング ワークショップ「マシュマロチャレンジ」	・アイスブレイキング、チームビルディング、メンバーの相互に理解する ・チームワークを発揮して、他チームより高いスパゲティタワーを建てる ・DECOの目的を理解し、各自が目標意識をもつ
デジタルマップとiPadを使ったDIG(災害 図上訓練)前半 ～浦安市の移り変わりを知る～	・iPadでの地図の操作の仕方を理解する ・ハザードマップの見方を理解する ・浦安市の地形変遷を理解する
デジタルマップとiPadを使ったDIG(災害 図上訓練)後半 ～浦安市直下型地震のシナリオをシミュ レーションする～	・震度6強のシナリオを体験する。 ・適切な地図データをiPadで表示・操作できるようになる。 ・シナリオが正しいとは限らないことを学ぶ。
災害時、学校や家庭でリーダーとして活 動できる中学生になる(医療サポーター 編)	・災害時、家族が、級友が負傷している時、戸惑うのではなく、知恵と技術を持ち自分と周りの人を助けられる自分になる ・学校でのリーダーとして活動できる
ファーストエイド講習	・災害時の応急処置について学ぶ ・身の回りのものを使って怪我の悪化を防ぐ
食事および就寝時	・非常時にできるだけゴミを出さないで食べることを学ぶ ・非常時に健康観察の意味を理解する ・避難所で周囲に配慮をしながら、就寝場所を設置する方法を学ぶ
東北被災地をめぐる対話	・石巻に出かける前に、東北大震災の現実や避難所の課題を学ぶ。 ・被災者と話し合える前提知識を身に付ける。 ・聞いた話を感想文をまとめる。
避難所で就寝	・避難所と同程度の環境で睡眠をとる
すごい災害対応訓練(実地訓練)	・よりリアルな状態で災害時の対応方法について考える ・初日に学んだことを応用する
iPadを使った番組制作(振り返り前半)	・動画や画像などのメディアを駆使し、番組を作成する ・研修プログラムを一つのストーリーにまとめる力を身につける ・リーダーとして人に伝える能力を身につける ・自分たちの学校に戻って見せられる資料づくり
振り返りコーチング(振り返り後半)	・目標達成度を図り、どのような行動変容があったかをフィードバック、各自が自分の成長を実感する ・今後のさらなる成長に向けた目標意識をもつ

参考)DECO受講者への事前・事後のアンケート結果(DECO住吉の事例)



べきかを考える大きなヒントにもなります。

また、チーム構築力を高める際にも、コーチングが用いるコミュニケーション手法が有効です。DECOの実地訓練では、参加者はグループに分けられ、グループ内ではリーダー、サブリーダー、地図担当、報告・撮影担当、健康担当といった形で各自に役割が与えられます。

役割分担に当っては、傾聴する態度や、相手のアイデアを引き出す質問の力、相手に共感的に関わる態度、といった、コーチングに特徴的なコミュニケーション手法が有効です。以下にそのためのヒントを列挙しますので、参加者にコミュニケーションの質を意識するよう呼びかけてみて下さい。

## チーム構築のヒント

- 仲間の声にしっかり耳を傾けること
- 仲間の知恵やアイデアを引き出す質問に心掛けること
- 相互理解を深め、仲間の強みを知ること
- 役割を任せ＝任せられる信頼を構築すること
- 誤りは素直に受け入れて、逆にそこから学習する柔軟な態度を持つこと

## まとめ

これまでDECOの理念と目的、そしてそれを実現するためのコーチングの方法について記してきました。DECOそれ自体は災害時の防災リーダーを育成するために開発されましたが、そこに含まれる6つの学習要素—①リーダーシップとチーム構築力、②ICTスキルを高める、③地域の想定される震災の規模・内容を知る、④地域コミュニティを知る、⑤サバイバルスキルを学ぶ、⑥基礎的なファーストエイドや医療サポーターとしてのスキルを学ぶ—は、平時においても

非常に重要なスキルや知識であると考えられます。

日々変化していく科学的な知見やICTツール、その他の社会環境の変化に対応して、DECOも虚心坦懐に最先端の方法論や技術を取り込んでいくつもりですが、冒頭に記した理念と目的は時代を超えて妥当する普遍的な理念・目的であると考えています。

この理念と目的に共感していただける多くの方々に、DECOの学習を通じて、災害時にも平時にも活躍できるリーダーとなってほしい、筆者を始めとするDECOプロジェクトメンバー一同の願いです。皆さんとどこかのDECO会場でお会いできることを、心から楽しみにしています。